

ただ乗り批判と説明責任

OSC 北海道 2019 にて、複数の来場者の方から「オープンソースへのただ乗りが問題、自分もそうなので後ろめたい」との指摘を受けました。

日頃利用しているオープンソースソフトウェアの開発者に報いるにはいくつかの方法があります。代表的な物としては以下の3つが知られています。

- 1 開発者にお金を支払う
- 2 開発に参加する
- 3 啓発活動に取り組む

お金のある人はお金を出し、技術のある人は開発に貢献し、表現力に長ける人は啓発活動にと、それぞれ得意を生かすべきです。具体的に何をするかについては強制はありません。

啓発活動はとかく「良い物があるから、使って欲しい」という宣伝活動になりがちです。オープンソースソフトウェアについては、既に一般人もその恩恵を受けながら、それを知りません。ソフトウェアについての正しい知識を広めるのが重要だと思います。もはやこれはソフトウェアの発展というテーマにとどまらないものです。情報通信技術は今や社会に広く浸透しています。その正しい理解は鉄道や飛行機の安全、広域停電やATMの障害の防止に不可欠です。

数十年来日本においては景気の浮揚が大きな課題でした。政治家はこぞって「景気回復」を公約に掲げて来ました。世界ではオープンソースが支える情報技術が経済に大きく貢献し、多くの新しいビジネスが生まれ、雇用が創出されました。しかし日本では政治家も官僚も教育者も情報通信技術に一定の関心を持ってはいるものの、経済に貢献した技術共有の実態をよく知らないままにいると思います。これでは有効な経済施策は打ち出せません。

オープンソースソフトウェアを人々が使ってもそれを知らないのはなぜでしょう。長時間故障なく作動し続けるので意識されない、つまり信頼性が高いのです。

信頼性の高いソフトウェアが対価なく入手可能で、必要な変更を加えた上で自由に使えるものだと一般人はなかなか理解してくれません。一般に品質の高い物は高価格、安物は品質が劣るものです。高品質のソフトウェアがどのように開発されるものか一般人にしっかり説明するのは技術者の責務だと思います。

参考資料

論語とコンピュータ

https://www.ospn.jp/osc2018-nagoya/pdf/OSC2018_Nagoya_netpbm%202.pdf

ハドソンのソースを訪ねて

https://www.ospn.jp/osc2018-do/pdf/OSC2018_Hokkaido_Netpbm.pdf

2019年6月 漆畑晶